

〔研究ノート〕

「論文紹介プレゼン」の効果

——経営学特殊講義「資料活用のスキル」「東欧の社会と経済」の
実践から見えたこと——

橋 本 信 子

1. なぜ「論文紹介プレゼン」なのか

本稿では、筆者が担当する二つの授業——「経営学特殊講義 資料活用のスキル」と「経営学特殊講義 東欧の社会と経済」——における「論文紹介プレゼン」（以下「」は省く）の実践を報告する。両科目はいずれも大阪経済大学（以下、本学）経営学部を設置科目で、秋学期に開講される選択科目である。受講者は1年生から4年生まで幅広く、いずれの授業にも複数回のグループワークを組み込んでいる。その一つが、各自で論文を探し、スライドにまとめ、グループメンバーに紹介する論文紹介プレゼンである。

なぜ、論文を「紹介する」形式を採用しているのか。それは、学生が論文に触れる機会を確保するためである。初めて取り組む学生には難しそうに映るようだが、実際には、論文は研究者や専門家が書いたものであり、構成が整っていて論理が明快である。そのため、テーマ設定から調査・構成までを自力で行うレポート課題よりも、論文を読み、要点を整理する方がよほど取り組みやすい。さらに、論文の構成や論の運び方に触れること自体が、レポート作成の基礎を学ぶ機会にもなる。論文を探すことで研究の射程を知り、論文を読み込むことで、専門家がどのような材料を用い、どのように論を組み立て、どのような文章を書くのかを学ぶことができるのである。

筆者が本学に着任した当初、論文を読んだ経験がない、読む機会がなかったという声を上回生からも聞き、論文を読まずにどのように調査や研究を行うのかと驚いた記憶がある。紙媒体でしか読めなかった時代とは異なり、現在はオンラインで容易にアクセスできるにもかかわらず、活用されていないのは惜しいと感じた。

筆者は経営学部の初年次教育担当者として着任したこともあり、1年次春学期に同学部生全員が履修する「アカデミックスキル」に論文検索の項目を組み込むことをすぐに検討した。その後4年間、他の担当教員と相談しながら内容をブラッシュアップし、検索だけでなく、論文を読み、参考文献として活用するところまで扱うようにした。

これと並行して、秋学期に単独で開講する科目では、論文紹介プレゼンを導入した。こちらでは、論文を読み込み、紹介するところまで行う。とはいえ、1年次春学期に学んだことを忘れてしまう可能性もあるため、検索方法、参考文献の示し方、スライドのまとめ方、

発表準備、話す姿勢・聞く姿勢などについても改めて指導し、取り残される学生が出ないようにしている。

論文の選択は基本的に学生に任せている。「東欧の社会と経済」のようなテーマ型の授業では、科目に合うものに限定するが、学生自身が選択眼を養うことを重視している。ただし、学生が書いたものや院生の論文は避けるように指導し、同じテーマであれば新しいものを推奨している。必ずしも古い論文が不適切というわけではないが、研究者は先行研究を踏まえて論を展開するため、特に情勢が変化しやすい分野では新しい論文から読む方が理解しやすい。たとえば、すでにEU加盟を果たした国の加盟を占う論文を、知識の少ない学生が初めて取り上げる意義は大きくない。むしろ誤解を招きかねない。

今回報告する2科目では、「この分野ならこの著者がよい」といった推薦は行っていない。学生から相談があれば、検索画面や本文と一緒に確認し、論文として適切かどうかを判断したり、著者の位置づけを伝えたりすることはあるが、主義主張を基準に介入することはしない。そのため、筆者と異なる立場の論文が選ばれることもあるが、そこは学生の選択に委ねている。輪読ゼミのように論文選択が授業全体を左右する場合とは異なり、論文紹介プレゼンは紹介すること自体に価値があると考えている。むしろ、教員の助けのない場で、まったく知らないメンバーに向けて紹介するため、発表者の読み込みや理解、伝え方の工夫がより試される。自分が理解できていないと説明できないという実感を得る機会にもなる。

発表の際には、大学での学びは競争ではなく、互いの取り組みから刺激を受けながら全員で伸びていくものであると伝え、発表者と聞き手が協力し合い、より良いものをつくる雰囲気を大切にしている。本学の学生は素直で誠実に取り組む資質を持っている。人見知りや発表への苦手意識を抱える学生も多いが、適切なファシリテーションがあれば克服し、大きく伸びることは「アカデミックスキル」でも確認している（藤田・橋本 2024）。小さな成功体験の積み重ねが、彼らの潜在力を確実に伸ばしていくのである。

2. 実践の場

さて、本稿で報告する論文紹介プレゼンの実践の場であった2科目の概要と、実践方法をまとめておこう。両科目は、共通の活動を含むが、科目の性質は大きく違う。なお、両科目の詳細な授業設計やふりかえりの分析については、橋本（2026）を参照されたい。

「資料活用のスキル」は、学生が自分の関心を起点に資料を探し、読み、整理し、伝えるという一連のプロセスを体験する授業である。扱う資料は書籍から新聞、雑誌、学術論文、インターネット情報まで幅広く、図書館やパソコン教室を行き来しながら、実践的にスキルを身につけていく。学生の受講動機も、そのようなスキルの獲得が第一である。初年度の2023年度は20人定員で2クラス、学年にかかわらず抽選であった。2023年度からは25人定員で2クラスを開講した。4年生を優先し、3年生以下は抽選という方式になったので、少人数のスキル系科目のクラスに1年生から4年生以上までが集うという授業になった。登録だけして来ない学生もいたので、グループワークは、3～4人のグループが

6つ程度と、教員が状況を把握しやすい規模である。

一方、「東欧の社会と経済」は、地域という“軸”を入りに、社会・経済・政治・歴史・文化など多様な領域へと視野を広げていくテーマ型の授業である。受講動機も、「ヨーロッパに興味がある」「高校で世界史をとっていたので」といったものや、未知の地域への興味が多い。未知の地域なだけあって、受講生の多くは、履修当初は「東欧がどこを指すのか」すら曖昧であり、ほとんど知識ゼロからのスタートとなる。だからこそ、地域を手がかりに調べ、考え、共有するプロセスを重視し、学生が未知の世界に自然と踏み出せるように授業を設計している。小レポートと名付ける3つの課題は、題材の親しみやすさと難度が逆転するように設計し、楽しみながらも自然に深い学びへ進めるよう工夫した。そのひとつが論文紹介プレゼンである。初年度の2023年度は定員を定めず大人数となったのでスライド提出にとどまった。2024年度からは80人定員としたことで、3つの小レポートのいずれもプレゼンまで行えるようになった。

両科目とも、論文紹介プレゼンは3人グループで行っている。事前にパワーポイントを提出してもらい、同じ論文が重ならないように教員がグループを編成する。発表は10～12分程度とし、質疑応答を含めても90分授業に収まるようにしている。授業の冒頭では、前回までのふりかえりや発表にあたっての注意点を確認し、遅刻者が途絶えた段階で出席状況を踏まえてグループ編成を調整し、グループワークへと移行する。発表と発表の間には、必要に応じて教員から全体への助言を挟む。全員の発表後にはふりかえりを書き、今後の予定や次回課題のリマインドを行うと、ちょうど授業時間いっぱいくらいになる。

「資料活用のスキル」はパソコン教室で実施するため、スライドを提示しながら発表を行う。一方、「東欧の社会と経済」は大教室での実施となるため、印刷した資料を交換しながら進める形式をとっている。両科目とも抽選科目であるため、友人同士で受講している割合は低く、なれ合いが生じにくい。特に大人数の「東欧の社会と経済」では、初対面の学生同士がグループを組むことが多いが、それがむしろ良い刺激となっていたようである。

このように、ねらいも受講者数も大きく異なる二つの科目で同じ活動を行ったところ、選ばれる論文の傾向に興味深い特徴が見えてきた。次にその詳細を紹介する。

3. 学生はどのような論文を選んだか

両科目で取り上げられた論文の一覧を付録として末尾に掲載した。ただ羅列しても傾向は見えてこないなので、独自に分類をした。まず、論文を1本1本、日本十進分類法(NDC)にあてはめて分類した。しかし、NDCは、経済が3番台、産業・工業・観光が6番台に離れているなど感覚的にしっくりこない面がある。また、「資料活用のスキル」で顕著だったように、社会心理学にあてはまる論文が多数出現するなど、分野ごとの出現の偏りがあるので、大分類過ぎても細分類過ぎても、実態がうまく見えない。そこで、本稿では、実態に即して、NDCの分類をアレンジして独自の細分類を試みた。その過程で、2科目では分布の偏りに違いがあることが明白になったため、科目ごとに表を分け、分野

名も傾向がわかるよう、多少変えている。本稿では、年度での違いや学年の違いによる傾向までは分析していないため、それらは付録の表では省いている。

3-1. 「資料活用のスキル」：分類結果

まず、「資料活用のスキル」から見てみよう。こちらはスキルを獲得することが主眼の科目であるため、テーマは完全に自由とした。4期8クラスの履修登録者は192名であったが、提出に至らなかった学生もあり、最終的に分類対象となったのは156件であった。重複はほとんどなく、151本の論文が選ばれていた。母数は「東欧の社会と経済」の半分ほどであるが、それでも分布はきわめて多様で、分野を定めるのに苦労するほど横断的なテーマが多かった。

分類の結果は次のとおりである。情報（4件）、読書（2件）、心理・認知（5件）、文化史（1件）、地理（1件）、政治（5件）、法律・法制度（1件）、経済・経営（6件）、産業・工業（11本・12人）、地域開発・都市計画（6件）、環境（4件）、観光（7本・8人）、マーケティング（8件）、社会（社会心理）（10件）、社会（労働）（3本・4人）、社会（福祉）（1件）、ジェンダー（1件）、犯罪（2件）、教育（16件）、自然（1件）、動物（4件）、身体・精神衛生（22本・23人）、技術（1件）、建築（1件）、情報（1件）、電気・電子（1本・2人）、生活科学（2件）、食文化（1件）、メディア（4件）、芸術・美術（2件）、スポーツ（14件）、言語（2件）である。

まず目を引くのは、身体・精神衛生（22本・23人）とスポーツ（14件）の多さである。睡眠やストレスといった身近な悩みを扱う論文が多く、学生が日常生活の延長線上で学術的な問いを立てている様子がうかがえる。また、スポーツ分野では、自身の競技経験を背景に専門的な論文を読み込む学生が多く、実技系の研究から心理学的手法を用いた研究まで幅広い。発表では、自分の体験を交えて熱く語る姿が見られ、「好きこそものの上手なれ」という言葉を実感する場面が多かった。

件数は少ないが、動物分野の4件も印象深い。犬を飼っているから、動物が好きだから、北海道旅行を控えていて熊の出没が気になったから、など、選択理由がどれもほほえましい。こうした“生活世界の延長”としてのテーマ設定は、「資料活用のスキル」ならではの特徴である。

分野に割り振ると見えにくくなるが、とりわけ注目したいのが、「桜の香りによる脳に及ぼす影響の機能生理学的解析」や、「天然染料で染まる色および現代衣料用テキスタイルとの比較から見出した色彩の特徴」といった論文である。いずれも化学分析や生理学的手法を用いた高度な専門研究であり、経営学部生が通常の授業で触れる機会はまずなさそうな領域である。それにもかかわらず、学生はデータベースで「これだ」と思う論文を探し当て、他大学所蔵のものをわざわざ取り寄せて入手するほどの熱意を見せた。論文を手にしたときの嬉しそうな表情や、生き生きとした語り口は、自由なテーマ設定だからこそ生まれたものである。また、染料の論文を選んだ学生は、かつてファッションデザイナーを志していたほどファッションに強い関心を持っており、その興味がそのまま論文選択の

動機となっていた。

自由なテーマ設定は、学生の個人的な経験や興味を学びの入口にする。スポーツ経験から専門的な論文を読み込む学生、香りの論文を他大学から取り寄せる学生、ファッションへの関心から染料の論文を選ぶ学生など、個々の物語がそのまま学びの動機となっていた。好きなことなら専門的な論文でも読み進められるという姿を何度も目にした。学生の関心がそのまま表に出るため、聞き手にとっても「自分では思いつかないテーマ」に触れる機会となり、発表の時間が新鮮な刺激に満ちていた。

3-2. 東欧の社会と経済：分類結果

「東欧の社会と経済」では、3年間で集まった299件の論文を、最終的に23分野に分類した。学生が選んだ論文は、博物館・アーカイブ、思想・哲学、宗教、歴史、地理、政治、法律・法制度、経済、産業・工業、地域開発・都市計画、環境、観光、人口・移民・難民、社会・福祉、ジェンダー、教育、食文化、人類学・民俗・表象、自然、芸術・美術、スポーツ、言語、文学と、ほとんどすべての分野にまたがっていた。地域という入口が、むしろ学問的な越境を促していることがわかる。

歴史分野：時代の幅が極端に広い

歴史（54論文・57人）は量的に最も多いが、その内容は現代政治に直結するものばかりではない。むしろ、中世・近世・近代・両大戦間期・第二次世界大戦期・社会主義期・体制転換期と、時代的な広がりが非常に大きい。国家形成、民族問題、暴力とプロパガンダ、ホロコースト、追放、記憶の継承、都市空間の変容など、東欧史研究の主要テーマに真正面から取り組む論文が多く、経営学部生が専門的な歴史論文を読み込む姿は印象的であった。扱われた地域もクロアチア、スロヴァキア、チェコ、ハンガリー、ポーランド、リトアニア、ベラルーシ、ルーマニア、バルカン諸国、旧ユーゴ地域など多岐にわたり、地域横断的な視点も少なくない。

政治・法制度分野：現代への強い関心

政治（36論文・44人）と法律・法制度（8論文・10人）は、歴史とは対照的に最近の出来事、とりわけロシアによるウクライナ侵攻に強く収束していた。侵攻の背景、国際関係、NATO 拡大、外交戦略、難民受け入れ、文化遺産の危機、プロパガンダ、メディアと戦争、危機の終結シナリオなど、現在進行形の問題を扱う論文が多い。周辺国の外交戦略や難民政策に関する研究も多く、学生が「ウクライナ侵攻を東欧全体の問題として捉える視点」を獲得していることがうかがえる。

一方で、民主化と都市空間の変化、宗教と政治、歴史問題をめぐる和解、ナショナリズム、多民族国家の統治、独立問題、平和構築など、ウクライナ侵攻とは直接関係しないテーマも少なくない。

法制度分野では、同性カップルの法制化、代理出産、マイノリティ法、姓名の登録制度、

国際法から見たクリミア編入など、社会制度・家族・人権・国際法を扱う論文があった。ビジネス法学科の学生も履修しているため制度研究に触れる素地があるとはいえ、東欧の法制度にここまで踏み込む姿は新鮮であった。

経済・産業・地域開発・環境・観光：構造を読み解く視点

経済（39論文・47人）、産業・工業（11論文・15人）、地域開発・都市計画（7論文）、環境（2論文）、観光（5論文・6人）といった経済系の分野は、科目名から想像される通り一定の割合を占めている。内容も、経済指標の比較だけではなく、政治経済・国際関係・社会変動・地域構造の分析へと広がっていた。

ウクライナ関連では、「資源の呪い」、農業、港湾、海上輸送、IT産業、エネルギー、EUとの経済関係、多国籍企業のネットワーク、貿易戦争など、侵攻前後の経済構造を多角的に読み解く論文が多い。ポーランド・ハンガリー・バルト3国では、EUファンド、外資企業、国家発展戦略、産業構造、ユーロ導入、経済危機、中国との協力枠組み離脱など現代の経済動向に加え、第一次大戦直後の戦時経済のように、歴史と経済の接点を扱う論文も見られた。

産業・工業分野では、自動車産業が特に多く、国際化、産業構造の変化、COVID-19の影響など、グローバル経済の中で東欧の産業がどのような位置を占めるかを分析する論文が目立った。農業・畜産・食品技術など、基礎的な経済活動を扱う論文もあり、経済を「生活の営み」として捉える視点も見られた。

地域開発・都市計画・環境・観光では、国境を越えた地域計画、都市再生、伝統的住居、エコツーリズム、自転車まちづくりなど、都市・地域・環境・観光を結びつけた研究が並び、学生の「地域を見る目」が育っていることがわかる。

人口・移民・難民分野：人の移動と社会変動

人口・移民・難民（8論文・13人）は、東欧地域の大きな特徴である「人の移動」を軸にした研究が中心であった。移民政策、難民受け入れ、人口減少、社会統合の課題など、人口構造の変化を社会政策や地域社会の変容と結びつけて捉える視点が見られた。前述のとおり、政治分野にもウクライナ難民の受け入れや周辺国の対応を扱う論文があり、学生が「人の移動」を通して東欧の現在を理解しようとしていることがうかがえる。

ジェンダー分野：社会変動を読み解く視点

ジェンダー分野（5論文・11人）は、社会主義期からポスト社会主義期にかけての女性像の変容、教育・進路選択におけるジェンダー構造、技術系学部の男女比、ジェンダー史研究の潮流など、東欧社会の変化をジェンダーの視点から読み解く内容が中心であった。学生がこうしたテーマに自然に手を伸ばし、ていねいに読み込んでいく姿は頼もしく、学びの広がりを感じさせた。

教育分野：制度・歴史・実践・文化が交差

教育分野（13論文・16人）は、エストニアの理科教育や理科教師教育、ハンガリーの教育法、チェコの教育史など、教育制度や教育史を扱う研究から、クロアチアの歴史教科書問題やポーランドのアウシュヴィッツ教育など、記憶と教育を結びつけた研究まで幅広い。教育が国家の歴史観や価値観をどのように伝えるかというテーマは、学生にとっても関心が高いようである。

また、ブラハ日本人学校の総合学習や遠足の取り組み、スロヴァキアの学校給食、ブルガリアの幼児教育など、学校現場の実践や子どもの生活に焦点を当てた研究も見られた。さらに、日本とポーランドの美術鑑賞教育の比較や、武道教育の位置づけなど、日本と東欧を架橋する視点を持つ論文もあった。教育分野は、制度・歴史・実践・文化のすべてが交差する領域であり、学生が「教育」という身近なテーマを通して、東欧社会の多様性や歴史的背景を理解しようとしていることがうかがえた。

言語分野：社会・文化・教育を横断

言語分野（17論文・23人）は、ポーランド語の謝罪表現や受動表現、チェコ語の文型といった言語構造の分析から、旧ソ連圏における「言語戦争」、戦時下のウクライナにおける言語行為の変化、ラトヴィアの言語政策、ベラルーシ語の危機的状況、多言語文化の問題など、言語を社会・政治・歴史と結びつけて捉える論文まで幅広くあった。

さらに、ウクライナやハンガリーにおける日本語教育の現状や課題、日本語学習の動機、教材開発など、日本語教育学の観点から東欧を見る論文も複数あった。学生は「言語」を文法や語彙の問題としてだけでなく、アイデンティティ、国家形成、教育、文化交流といった広い文脈の中で理解しようとしていた。学生が「東欧」という地域を入口に、社会言語学・教育・文化研究へと自然に踏み込んでいく姿がよく表れていた。

食文化分野：ブルガリアのヨーグルト文化

食文化分野（5論文・13人）はブルガリアに集中しており、外食文化の変容、ヨーグルトをめぐる言説、博物館展示における表象、日本との文化的接点など、食を通して東欧社会を読み解く視点が特徴的であった。日本でもよく知られる「ブルガリアのヨーグルト」が、社会主義期からポスト社会主義期にかけてどのように位置づけられ、語られ、展示されてきたのかを追う論文が人気で、身近な食から学術的探究へと踏み込む姿が見られた。

小さくてもキラリと光る分野

件数としては少ないが、博物館・アーカイブ（2件）、思想・哲学（2件）、宗教（2件・3人）、地理（1件）、社会・福祉（4件）、人類学・民俗・表象（4件）、自然（2件）、芸術・美術（8件）、スポーツ（2件）、文学（7件）といった分野にも学生は目を向けていた。博物館展示を通じた記憶の継承、哲学的視点からの社会分析、地域の自然環境や民俗文化への着目、芸術作品を通じた社会理解など、学生が自分の関心や経験を起点に、東

欧という地域へと自然に接続していく姿が見られた。

国別の傾向：学生の関心が形づくる「東欧の地図」

国別に見ると、学生の関心の偏りがより明確になる。国別の件数は、複数国を扱う論文をそれぞれの国に計上した延べ人数である。この方法をとることで、学生がどの国に関心を寄せたのかをより正確に把握できる。最も多かったのはポーランドで64件と圧倒的であり、日本におけるポーランド研究の層の厚さを反映していると同時に、学生自身の関心の高さも示した。余談だが、他の小レポート課題（作品紹介や身近な東欧産品の調査）でもポーランドは最頻出であり、「東欧といえばポーランド」というイメージが学生の中に強く根づいていることがうかがえる。

ウクライナが52件で続き、侵攻以降の関心の高まりが如実に表れていた。ハンガリー（28件）やチェコ（25件）も人気が高く、これらの国も他の課題で頻出している。ブルガリア（24件）、クロアチア（14件）、ルーマニア（14件）も一定数選ばれていた。バルト3国では、エストニア（7件）、ラトヴィア（4件）、リトアニア（12件）と、規模は小さいながらも安定した選択が見られた。旧ソ連圏ではベラルーシ（9件）やモルドヴァ（1件）も含まれており、多様な国々への関心の広がりが確認できる。旧ユーゴスラヴィア地域では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ（5件）、セルビア（4件）、ユーゴスラヴィア（4件）、モンテネグロ（3件）と分散しており、民族紛争や内戦の記憶が学生の関心を引いていることがうかがえた。なお、マケドニア／北マケドニアは新旧名称として統合して扱った。

また、チェコスロヴァキア（6件）や、バルト3国（5件）、さらには「東欧」「中東欧」といった地域横断的な研究も一定数存在し、学生が対象地域を「現在の国境」だけではなく「歴史的文脈」や「文化圏」でも捉えていることが示唆される。

4. 2つの授業の「チャレンジの質」の違い

2つの授業を並べてみると、学生が挑戦する方向性がまったく異なることが見えてくる。「資料活用スキル」では、学生の関心そのものが出発点になる。スポーツ、香り、染料、動物、睡眠、ストレス、マーケティング、社会心理など、生活世界に根ざしたテーマが多く、そこから学術的な方法論へと踏み出していく。好きな競技の専門的な論文を読み込み、熱く語る学生もいれば、“これだ”と思う香りの論文を他大学から取り寄せて紹介する学生もいた。完全に自由な環境では、学生の個人的な興味がそのまま学びの原動力になる。

一方、「東欧の社会と経済」では、地域という“ゆるやかな縛り”が出発点になる。東欧という軸を通すことで、歴史・政治・経済・文化・言語・文学・ジェンダー・移民など、多様な分野へと関心が広がっていった。地域という入口が、むしろ自由な探究を生むことを実感した。

両者の違いをまとめると、「資料活用スキル」は関心から方法論へ越境し、「東欧の社会と経済」は地域から分野へ越境するという構図が見えてくる。どちらも学生の世界を広げるが、その広がり方は違う。自由であることで“個人の物語”が立ち上がり、地域とい

う枠があると“学問の広がり”が立ち上がる。科目のねらいや条件が変わるだけで、学生が異なるチャレンジを生み出すことは興味深い。

授業規模の違いも学びの質に影響していた。「資料活用のスキル」は少人数であるため、教員の目も学生同士の目も行き届く。さらに、論文検索の実習、参考文献リストの作成練習、スライドの表紙作成（著者・発表年・論題・掲載誌・巻号等を必ず記載することを徹底する）など、準備段階の指導をていねいに行っている。そのため、論文の捏造や記載の不備はほぼ起こりえず、学生は「ごまかせない」環境で自然とていねいに準備するようになる。

「東欧の社会と経済」は大人数であるため、事情が異なる。検索の練習をし、スライドも事前提出させているものの、人数が多い分、教員がすべての記載事項を完璧に確認するのは難しい。実際には完全な捏造はほぼないが、表紙に書くべき項目が抜けていたり、論文タイトルではなく学生が自作したタイトルを載せてしまっていたりするなど、書き方の不備が原因で実在する論文が確認しにくいケースが多々ある。これは本当に実在するののかと思って調べてみると、実は書誌情報が不完全なだけで存在していたということもよくある。こうした経験から、今後は、準備段階からピア・チェックを取り入れようかと考えている。スライド作成の前に、取り上げる論文の著者名、論題、掲載誌・巻号、発表年などを学生同士で確認し合う仕組みを入れることで、こうした不備の早期発見や、「ごまかせない」環境をつくることができるのではないか。

そのような課題は残るものの、「目の前のメンバーに向けて発表する」という状況は、学びの質を確実に高めていた。要約だけの課題であればAIに任せてしまう学生もいたかもしれないが、実際には架空の論文をでっちあげる例はほとんどなく、むしろ「次はもっと良くしたい」という意欲が生まれていた。互いの発表に刺激を受けながら成長していく姿は、筆者が大切にしてきた「楽しくてためになる」授業観とも重なる。

「資料活用のスキル」では、最終回に「ふりかえりシート」を書いてもらってきたが、そこでは、152件中43件が「論文探し」「論文プレゼン」をもっとも印象に残った授業として挙げていた。コメントには、

「自分の興味のある分野の論文を探すのが思いのほか楽しかった」

「論文の種類の大きさ、こんな論文があるのか！など新しい発見が一番多い授業だった」

「自分では読まない論文に出会えて楽しかった」

「キーワードから探して“これだ！”と思う論文に出会えた」

「難しかったが、自分の言葉で説明できたのが嬉しかった」

「同年代がどんな論文に関心があるか知れて面白かった」

「今までは堅苦しいテーマのものしかないと考えていたけど、思っていた以上に興味がそそられるものも多いと知ることができた」

といった声が並んだ。

これらのコメントからは、学生が自分の関心を起点にしながら、学術的な文章に触れ、

新しい視点を得ていく過程がうかがえる。自由なテーマ設定であっても、あるいは地域という縛りがあっても、学生が主体的に学びを広げていく姿は共通していた。

5. おわりに

2つの授業での論文紹介プレゼンの実践をふりかえると、学生の学びは“越境”から始まっていた。自分の関心から未知の方法論に踏み込む越境、未知の地域から多様な分野へ広がる越境。どちらの授業でも、学生が主体的に動き出す瞬間に立ち会うことができた。完全に自由な環境では、学生の生活世界や個人的な興味が学びの入口になる。地域という縛りを設けると、学問的な広がりや自然に生まれる。異なる条件が異なるチャレンジを生み、学生の可能性を引き出すということを実感できた。

学生はやりがいを求めている。難しい課題に挑戦し、理解した部分を自分の言葉で語れたとき、彼らは確かな達成感を得る。その姿を見るたびに、学生の可能性に敬意を抱く。今回の実践はまだ途上であり、筆者自身、今後も別の大学で同様の取り組みを続け、学生が論文に触れる機会をさらに広げていきたいと考えている。論文は学生の世界を広げるための豊かな資源である。今後も、学生が学術的な文章に触れ、そこから新しい視点を得る機会を大切にしながら、授業デザインを磨いていきたい。

参考文献

- 橋本信子・藤田里実（2024）「多人数クラスにおけるアクティブラーニングの工夫—初年次教育科目「アカデミックスキル」における授業実践—」『大阪経大論集』75(1)
- 橋本信子（2026）「スキル系科目とテーマ型科目における学びの比較—学生のふりかえり記述からの探索的分析—」『大阪経大論集』77(1)
- 藤田里実・橋本信子（2024）「初年次教育科目「アカデミックスキル」から学生が学び取ったもの—振り返りアンケート記述からの探索的分析—」『大阪経大論集』75(1)

付録 1. 「資料活用のスキル」で取り上げられた論文一覧（2022-2025年度）

分野	論題
情報	大学生の Instagram の利用と主観的幸福感との関連
	大学生のソーシャルメディア利用の規定要因 ―Twitter・Instagram・TikTok に着目して―
	道具としての生成 AI を「使い倒す」人たち
	日本の大学生の SNS 利用と学業成績との関連性について
読書	電子書籍ユーザー意識調査による普及要因分析の試み
	読者がフロー体験と気分変容に与える影響 ―小説と新書の比較を通して―
心理・認知	血液型と性格の無関連性 ―本と米国の大規模社会調査を用いた実証的論拠―
	子どもの死の概念
	子どもはなぜサタクロスを信じ、やがて信じなくなるのか？
	好みの音楽聴取が記憶課題の成績に及ぼす影響
	自己隠蔽尺度 (Self-ConcealmentScale) 刺激希求尺度・自覚的身体症状の関係
文化史	金次郎像研究史序論 ―偉人像はいかに調査研究対象とされてきたか―
地理	東京ディズニーランドのイメージ構成要素とその形成要因
政治	極超音速兵器をめぐる米中露の取り組み ―核抑止・核軍備管理への含意―
	在日ムスリムの死を巡る研究動向
	「宗教被害」と人権・自己決定権をめぐる問題 ―教会関連の裁判を中心に―
	日本の安楽死・尊厳死 ―法制化は必要か？―
	民主主義の正当性の力 ―住民投票をめぐるカタルーニャ問題―
法律・法制度	フランチャイズ契約締結の過程における情報提供義務 ―裁判例の分析を中心に―
経済・経営	個人投資家の行動変化 ―リスクとリターンの変化に対する行動分析―
	支払手段としての「仮想通貨」
	日本のスポーツ経営の現状と取り組むべき優先課題 ―スポーツ経営における「ブランド」の重要性―
	日本の経営を再考する
	標準化と適応化によるグローバル戦略の一考察
	和菓子メーカーの組織的アフィニティ形成と差別化戦略
産業・工業	インドネシアバイク市場とものづくり
	規格外野菜の誕生：1920年代～70年代における農産物の工業製品化（2件）
	コンビニフランチャイズ本部による廃棄ロス助成金制度の批判的検討 ―食品廃棄ロスを減らし、コンビニ加盟店の収益をあげるために―
	三備地域のデニム産業におけるバリュー ―プロポジションの醸成要因に関する事例研究―
	自動で水田雑草を除草するアイガモロボットの開発
	スポーツメーカーが提案するヘルスマネジメント事業
	地域特産品の加工とオーナー制度による中山間地域活性化
	焙煎度がコーヒーの味に及ぼす影響
	東日本大震災後の節電の効果および継続性について ―東京電力管内を対象として―
	ビジネスとしてのクラフトビール ―日本の製造にかかる諸課題
	ボリビアにおける日本製中古自動車の輸入政策 ―規制と「合法化」の狭間で―
	空き家問題の解決に向けた地域内譲渡、寄付モデルの研究 ―和歌山県における事例研究―
地域開発・都市計画	美しい街づくりは、街路樹の基盤整備から：街路樹の根上がり対策事例（歩行者にも樹木にもやさしく）
	宿泊施設の衛生的環境に関する実態調査 ―住宅宿泊施設事業法施工期の長崎、京都、大阪における室内環境調査―
	ジュゼッペ・ボッジ作成の土地利用規定書にみる建築条件と眺望 フィレンツェのコッリ大通り建築と周辺の住居地区の形成に関する研究（その1）
	「単独世帯」の動向から見た空き家対策
	定住促進の視点からみた地域外人材の役割とその支援について ―「地域おこし協力隊」事業を事例と―

環境	生き魚を餌として用いるオオクチバスの釣り方とその駆除効果
	近隣自治体のごみ有料化が合意形成に与える影響 ―会津美里町住民へのごみに関するモニター調査をもとに―
	子どものごみ減量行動に及ぼす親の社会的影響
	地球温暖化の自然環境・人間社会への影響とリスク対策
観光	アニメ・ツーリズムの可能性：アニメ・マンホール蓋に描かれたアニメ作品（2件）
	アニメ聖地における地域コラボビジネス創造過程の主体分析
	京都・滋賀・奈良3府県の観光拠点間における口コミの類似性に着目した観光候補地群の分析
	新石垣空港開設による需要予測と八重山観光に関する研究 ―航空貨客需要予測―
	新興コンテンツツーリズムの可能性 ―地方の事例研究―
	地域と共存する宿泊施設になるために経営者に求められる視点 ―日本まちやど協会に所属する宿泊施設とその経営者を事例として―
	湯布院温泉における小規模旅館の経営動向
マーケティング	JPC（ジャパニーズ・ポップカルチャー）の文化マーケティング戦略
	広告におけるAIモデルの私生活設定と商品特性の合致度が商品魅力に与える影響
	コロナ禍とともに生まれたマーケティングの新トレンド ―プロ野球ビジネスの求める新規顧客層と施策に関する考察―
	コンビニエンスストアにおける見切り販売による食品廃棄削減の可能性
	サービス業のグローバル・ブランディングに関する再考 ―ユニバーサル・スタジオの事例から―
	消費者の選択行動とインターネット
	フードチェーンにおけるキャッシュレス利用時の購買促進効果 ―マクドナルドおよびスターバックスの比較を通じた分析―
社会（社会心理）	マーケティング論の再生
	The Experimental Generation of Interpersonal Closeness: A Procedure and Some Preliminary Findings
	コロナ禍における外出行動のメカニズムについて ―罪悪感と文化的自己観に着目して―
	社会的ジレンマにおける集団協力ヒューリスティクスの効果
	職場のいじめ・嫌がらせにおける傍観者の建設的な介入を促すためのゲーミング・シミュレーション
	女子大学生の推し活に関する検討 ―ファン活動、オタク活動、推し活のイメージと、推し活をする理由―
	大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応 ―性差と恋愛関係進展度からの検討―
	パチンコ店における高齢者の遊戯状況 ―高齢者率と来店目的―
	ボランティア活動の動機の検討
社会（労働）	漫画における関西弁のイメージ
	メディアの登場人物はどの程度痩身体型に偏っているのか ―女性芸能人・K-POPアイドル・YouTuberのBMI分析―
	職場におけるハラスメント規制に関する一考察
社会（福祉）	日本における正規・非正規雇用者の所得格差の現状と要因分析
	日本の労働時間はなぜ減らないのか？ ―長時間労働の社会的考察―（2件）
ジェンダー	発達障害者の就労上の困難性と具体的対策
犯罪	同性パートナーシップ制度に反対するパブリックコメントの分析
	男子少年による殺人 ―殺人少年73人の類型化の試み―
教育	特殊詐欺の誘惑と恐怖 ―若年成年の闇バイトと高齢者被害―
	HMD（VRゴーグル）を利用した没入型メタバース環境下でのオンライン授業実践
	海外にルーツをもつ大学生による自己の在り方の意味づけ ―授業の振り返りを糸口とした語りより―
	韓国の特殊教育
	ゲーム要素を入れた授業デザイン枠組みの開発と実践
	高校生と大学生との相互作用によるソーシャルメディア利用意識の変化 ―サービ斯拉ーニングを通して―
	先延ばし意識特性尺度の作成と信頼性および妥当性の検討
教育	児童生徒の読書量を増やすための読書嫌いの要因分析

教育	深夜アルバイトが大学生の授業意欲・学業意欲・大学意欲に及ぼす影響
	青年期の居場所青年感が心理的適応，学校適応に与える影響
	大学生におけるアルバイト就労と精神的健康および修学との関連
	大学生の学習意欲，大学生生活の満足度を規定する要因について
	大学生の心理についての研究（１）－大学生の恋愛不安－
	大学生の長期休暇中における自主学習継続のための取り組み－モチベーション維持のための工夫－
	テレビの子どもへの影響について－発達の視点からの展望－
	発達支援における愛着障害への支援の重要性－愛着形成，愛着障害をどう捉え，どう支援していくのか？－
	論理的思考力の育成に向けた生成 AI の活用に関する基礎的研究
自然	近年のサンゴの白化現象と大規模なサンゴ礁の白化現象－新たなサンゴ礁の脅威－
動物	イヌはヒトの行動に何を見ているのか？
	クマ類の冬眠－繁殖との関係－
	柴犬に多くみられる問題行動
	16世紀の宣教師アルメイダが書き残した長崎県五島列島のアシカ科動物の記録
身体・精神衛生	生きづらさを抱えたポストコロナ社会における小中高生の自殺問題
	インタビュー調査による若年女性のダイエット心理に関する研究
	高温入浴の入眠直後の深睡眠に及ぼす効果の検討
	子どもの健康と睡眠－コロナ禍と睡眠に関する動向と課題－
	子どもの睡眠
	コロナ禍が大学生の精神的な健康に及ぼす影響－コロナ禍とアフターコロナの比較検討から－
	コロナ禍における看護系大学生の人との関わりの変化とメンタルヘルスに関する研究 ^{♂♂}
	桜の香りによる脳に及ぼす影響の機能生理学的解析
	寝具と睡眠
	人工甘味料と健康
	睡眠時間が翌日終日の認知・運動機能に与える影響
	大学新入生の生活習慣と精神的健康の変化
	大学生の隠れ肥満と人格特性，生活習慣および心理的ストレスの関連性
	大学生の食品廃棄行動に及ぼす関連要因に関する研究
	テントサウナを用いた「山サウナ」浴がストレスや自律神経機能および睡眠に与える影響
	日本人筋肉量の加齢による特徴
	認知症高齢者に対するイヌによる動物介在療法の有用性
	眠気とヒューマンエラー（２件）
	バイスタンダーが一次救命処置を実施した際のストレスに関する検討
	冷えと食および生活習慣との関連－Microsoft Forms を活用したインターネット調査－
	やる気を引き出す動作練習
	我が国における大麻草由来の成分を用いた製品の適正な普及に向けた課題－Cannabidiol (CBD) に焦点を当てて－
技術	技術とトロック問題：自動運転車の技術倫理
建築	カフェでの会話行動に及ぼす照度と BGM 音量の影響
情報	ホームドア開閉制御システムのための新型 QR コード－‘tQR’による安定したホームドア開閉検出－
電気・電子	半導体 次なる絶頂（２件）
生活科学	天然染料で染まる色および現代衣料用テキスタイルとの比較から見出した色彩的特徴
	服の印象におけるデザイン，色，素材の優位性
食文化	30年後の食を考える料理人たち
メディア	「推し」とメディア利用－WEB モニターアンケート・オンライングループインタビュー調査の結果から－
	ゲームのリメイク作品に対する評価を決定づける体験要素

メディア	新型コロナは私たちの暮らしや意識をどう変えたか ―「新型コロナウイルス感染症に関する世論調査」の結果から―
	Z世代と「テレビ」
芸術・美術	アニメ産業の姿を明らかにする取り組み：その必要性と教育・ビジネスモデルからのアプローチ
	コロナ禍のポピュラー音楽聴取，コロナ後のポピュラー音楽ライブ
スポーツ	弓道の握り革の使いやすさが手の内の力に及ぼす影響
	高校野球選手の走速度と床反力の関係について
	コロナ時代のアウトドアの楽しみ方
	ジュニアスポーツにおける指導の現状と今後の課題（その1）北海道地区の野球におけるジュニア期指導に着目して
	審判員の判定に関する心理学的考察 ―大学サッカー選手を対象とした審判員の判定に関する印象調査―
	心理的競技能力の評価尺度の開発とその意義
	速度の異なる腹筋トレーニングにおける筋活動
	ソフトテニスの協議不安とその対応策について
	大学生サッカー競技者における審判員に対する抗議の心理的要因
	大学生サッカー選手における指導者の言葉かけと自己能力評価の関係性
	日本の大学スポーツ選手における抑うつ症状の実態調査 ―抑うつ症状，怪我，およびパフォーマンスとの関連―
	バレーボールゲームにおけるセッターに関する研究
	ブラジル格闘技の現在 ―柔道 ブラジリアン柔術 総合格闘技―
	ラグビー選手における大学1年生のシーズン前からシーズン終盤までの身体組成の推移
言語	日本語学習における AI 機械翻訳の活用方法
	評価表現に着目した皮肉文の分析と抽出

付録2.「東欧の社会と経済」で取り上げられた論文一覧（2023-2025年度）

分野	国・地域	論題
博物館・アーカイブ	バルト3国	バルト三国のアーカイブス
	リトアニア	パンデミックと博物館のデジタル化の傾向ーリトアニア共和国の統計データの分析ー
思想・哲学	東欧	アウシュビッツ以後の言語の問題
	東欧	ホロコーストから見た人間の道徳性
宗教	ウクライナ	書評 高橋沙奈美著『迷えるウクライナ：宗教をめぐるロシアとのもう一つの戦い』
	リトアニア	東欧における東洋の宗教：リトアニアからの三つの事例（2件）
歴史	ウクライナ	ウクライナ戦争の歴史的位相
	エストニア	エストニアにおける国民化政策の変遷ー戦間期と冷戦後の比較からー
	エストニア	両大戦間期エストニアの権威主義体制に関する研究動向
	クロアチア	「クロアチア独立国家」におけるセルビア人抹殺政策
	クロアチア	クロアチア独立国の「全体主義体制」と「民族教育」ーウスタシャ運動をめぐる学校教師たちのナショナリズムの分析ー（2件）
	クロアチア	クロアチアにおける民族問題とセルビア人の地位ーその歴史的要変遷と内戦終結後の問題状況ー
	クロアチア	クロアチア紛争後のコメモレーションによるナショナル・アイデンティティの強化と継承
	クロアチア	東欧から「グローバル・ファシズム」を再考するー戦間期ウスタシャ運動の政治暴力とプロパガンダー
	クロアチア	両大戦間期のイストリアにおけるクロアチア人問題
	スロヴァキア	スロバキア人とユダヤ人の協力と抵抗
	スロヴァキア	スロバキアのホロコースト（1938年～1945年）
	スロヴァキア・ルーマニア・ハンガリー	1942年におけるユダヤ人強制移送にかんするドイツの外交交渉ースロバキア、ルーマニア、ハンガリーを例にして
	セルビア	近代セルビア国家の成立に関する諸問題 1842年の護憲党体制の確立に至る過程と内実（上）
	ソ連・東欧	「ソ連・東欧圏」における経済改革と政治危機1960年代のドイツ政治外交と「ブラハの春」
	チェコ	暴かれる秩序の暴力ーチェコ共和国における3つの追放論ー
	チェコ	チェコ社会における多極化とネ이션形成ー近代的「市民社会」の形成を体操運動ー
	チェコ	中世チェコ国家の誕生、君主・貴族・共同体の歴史的展開
	チェコ	「ヒトラーの新秩序」とその後がもたらした地域社会の変容：チェコ工業都市オストラヴァを事例に（1938-1948年）
	チェコスロヴァキア	正常化体制期における「チェコスロヴァキア主義」1980年代のスロヴァキア知識人による歴史議論
	チェコスロヴァキア	チェコスロヴァキア建国とロシア革命
	中東欧	Image, History and Memory: Central and Eastern Europe in a Comparative Perspective
	東欧	アウシュヴィッツへの道：ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように
	東欧	戦後初期における「アムネスティー（恩赦・忘却）政策」の展開
	東欧	第2次世界大戦初期におけるナチス・ドイツのユダヤ人強制移送策
	東欧	東欧社会主義の指導者像
	東欧	東欧諸国における第二次世界大戦の記憶
	東欧	東欧における絶対主義の形成
	東欧	東欧に関する連合国の戦争目的
	ハプスブルク帝国	第一次世界大戦期のイギリスの戦争目的とハプスブルク帝国
	ハンガリー	18世紀ハンガリー王国における「ツィガーニ問題」と中央・地方統治権カーボルシヨド県関連文書の分析から
	ハンガリー	1956年革命とハンガリー現代史研究（2件）
	ハンガリー	東欧と冷戦の起源再考ーハンガリーの転機：1945-1949ー
	ハンガリー	バリ講和会議体制とハンガリーー亡命政治家から見たヨーロッパ国際関係ー

歴史	ハンガリー	ハンガリーの体制転換 ―その現場と歴史的背景―
	ブルガリア	ブルガリアの都市と交易に関する史的研究：19世紀ブルガリア正教徒商人を中心に
	ベラルーシ	ハティニ虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶
	ポーランド	アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会おうということ
	ポーランド	アウシュビッツ：ポーランドの世界遺産
	ポーランド	現代史における宗教研究の可能性と課題 ポーランドの視点から
	ポーランド	ナチス・ドイツによる強制収容所と犠牲者に関する研究 ―ポーランド南部に及ぶ東部の現地調査を通じて（1）―
	ポーランド	ポーランド・ナショナリズムの形成 ―ドモフスキ『近代的ポーランド人の思想』をめぐって―
	ポーランド	ポーランドにおける民族主義運動の研究についての覚え書
	ポーランド	ヨーロッパ史研究の新地平：ポーランドからのまなざし
	ポーランド・リトアニア	多言語国家としてのポーランド＝リトアニア
	ポーランド・リトアニア	多宗派の共和国 ―近世ポーランド・リトアニア共和国における諸宗派共存体制とその編成―
	ユーゴスラヴィア	「バルカン化」の起源 ―バルカン諸国とバルカン戦争―
	ユーゴスラヴィア	引き裂かれた国家 ～旧ユーゴ地域の民主化と民族問題～
	ユーゴスラヴィア	ユーゴスラヴィア内戦の歴史と現実 ～久保慶一著「引き裂かれた国家～旧ユーゴ地域の民主化と民族問題～」(有信堂2003年)をめぐって～
	ヨーロッパ	二〇世紀前半のヨーロッパにおける内戦・暴力・民主主義
	ラトヴィア・エストニア	歴史をどう伝えるか ―ラトヴィアとエストニアの占領博物館を例に―
	リトアニア	杉原千畝研究の現状と展望
	リトアニア	1930年代末リトアニアにおける反ユダヤ主義 ―リトアニア人連合の新聞『ヴェルスラス』の分析を中心に―
	リトアニア	リトアニアにおけるホロコーストの記憶
地理	ルーマニア	二十世紀初頭のルーマニアにおける選挙権改革 ―国民自由党と単一選挙部会案―（2件）
	リトアニア	リトアニアとその第三の都市クライペダ
政治	ウクライナ	How the Ukraine crisis ends
	ウクライナ	ウクライナ侵攻に見るメディアと戦争 ―軍事侵攻1年を受けて―
	ウクライナ	ウクライナ戦争をどうみるか
	ウクライナ	ウクライナ戦争・今後のシナリオと終結への課題（2件）
	ウクライナ	「ウクライナ戦争」の一年 ～対ウクライナ軍事支援・武器供与の拡大と戦闘の拡大～
	ウクライナ	ウクライナと NATO の東方拡大
	ウクライナ	ウクライナの情勢について
	ウクライナ	ウクライナ・ロシア戦争の背景と今後の世界
	ウクライナ	調査研究ノート プロパガンダの現在 ウクライナ侵攻から一年
	ウクライナ	東西対立がもたらす現代ウクライナの分裂と危機 ―モンゴルの外交方針からの比較検証―（2件）
	ウクライナ	民族から考えるウクライナ危機
	ウクライナ	ロシアによるウクライナ軍事侵攻 ―われわれに何ができるか―
	ウクライナ	ロシアによる侵攻によって脅かされるウクライナの文化遺産保存体制
	ウクライナ	ロシアのウクライナ侵攻：ウクライナ危機の起源（2件）
	ウクライナ・チェコ	チェコ・ウクライナ関係に関する一考察 ―ウクライナ戦争からの避難民に注目して―（2件）
	ウクライナ・ポーランド	ウクライナ侵攻初期におけるポーランドの外交戦略 ―マルチ、バイそして地域リーダーに？―
	ウクライナ・ポーランド	ポーランド・ウクライナ関係とポーランドのウクライナ難民受け入れの現状（2件）

政治	ウクライナ・リトアニア	リトアニアから見たウクライナ問題
	エストニア	エストニアの国家 IT 戦略と電子政府
	クロアチア	クロアチア自治州に関する一考察
	コソヴォ	「東欧の解体？」 ―コソヴォを事例として―
	チェコ	チェコ共和国における民主化と都市空間の変化 ―民主化20年後の東欧―（2件）
	中東欧	地方自治の制度設計と政党政治
	ハンガリー	カーダールとオルバーン：ハンガリー外交史における2つの「シーソー政策」
	ハンガリー	ハンガリーにおけるデモクラシーのバックスライディング
	ポーランド	ジェンダーと反欧州 ―ポーランドにおける若年層の政治志向―
	ポーランド	ポーランドにおける体制転換以降の政治・経済・社会的変動 ―カトリック教会の動向とポピュリズム政治の台頭を中心に―
	ポーランド	ポーランドのローマ・カトリック教会が主導するポーランドとウクライナ両国間の歴史系問題における「和解」への動き ―「ヴォルィーニ（ヴォリーニ）の悲劇」問題に関して―
	ポーランド	ヨーロッパ精神文化とポーランド（2件）
	ポーランド・ハンガリー	中国共産党とポーランド・ハンガリー事件（1956年）の教訓
	ボスニア・ヘルツェゴヴィナ	ボスニア・ヘルツェゴヴィナの平和構築再考 ― Dayton 和平合意25年後の教訓―
	ボスニア・ヘルツェゴヴィナ	ボスニアヘルツェゴビナにおける安全地域
	ボスニア・ヘルツェゴヴィナ	ボスニア紛争研究における社会心理学の知見の導入
	モンテネグロ	モンテネグロにおける独立問題と民族アイデンティティ（2件）
	モンテネグロ	モンテネグロの独立とヨーロッパ統合
	ロシア（ソ連）	現代ロシアの歴史認識問題 ―共産党によるスターリン再評価―
法律・法制度	ウクライナ	国際法から見たロシアによるクリミア編入と国際社会および EU の対応
	クロアチア	クロアチアにおける同性カップル法制化と近代法経験（2件）
	チェコ	チェコにおける代理出産の法制化に関する動向とアイデア
	ポーランド	ポーランドの最高裁判所前で考える「歴史」と「法」
	ポーランド	ポーランドのマイノリティ法の批判的分析 ―シロンスク地方の言語問題を例として―
	ポーランド・日本	ポーランドの選択的夫婦別姓制度から見た日本の夫婦別姓についての問題（2件）
	ポーランド・日本	ポーランドと日本間における刑法学界の学術交流（1974-2023年）
	リトアニア	リトアニアにおける姓名の登録制度に関する考察 リトアニア語にはない文字の名前への登録をめぐって
経済	ウクライナ	ウクライナ経済の実相と対 EU 関係（2件）
	ウクライナ	ウクライナ侵攻とエネルギー
	ウクライナ	ウクライナ戦争と EU の経済安全保障
	ウクライナ	ウクライナ・ドンバス地方に見る「資源の呪い」とロシアのウクライナ侵攻（2件）
	ウクライナ	ウクライナにおける IT 産業の現状
	ウクライナ	ウクライナの港湾とロシア侵攻による海上輸送の影響
	ウクライナ	ソ連崩壊後のウクライナ農業 ―農産物輸出大国の実相―
	ウクライナ	多国籍企業のウクライナを拠点とするグローバル・イノベーション・ネットワーク～米国企業を中心として
	ウクライナ	ロシアとウクライナの10年貿易戦争
	クロアチア	クロアチアにおける自主管理企業の民営化
	セルビア	セルビアの輸出競争力：西バルカン諸国における域内産業関連の強化に向けて
	中東欧	COVID-19 禍における中東欧経済
	中東欧	中東欧諸国における産業政策

経済	中東欧	中・東欧諸国の EU 新規加盟とユーロ採択：金融制度改革
	中東欧	中東欧の失業問題 ―そのいくつかの特徴について―
	中東欧	ポピュリスト政権の経済政策 ―ヴィシエグラード諸国の比較から―
	東欧	東欧経済改革と外資の役割（2件）
	東欧	東欧におけるグローバル化と地域変容
	バルト3国	世界金融危機1年後の経済状況 中東欧新規 EU 加盟国に経済危機：バルト3国を中心に
	バルト3国	中東欧新規 EU 加盟国の経済危機：バルト3国を中心に（2件）
	バルト3国	バルト三国の「中国―中東欧国家合作」離脱とその経済的影響
	ハンガリー	政治循環と外資依存経済 ―ハンガリー政治経済動向（1989～2011年夏）―
	ハンガリー	ハンガリーが辿り着いた先 国家資本主義3.0
	ハンガリー	ハンガリー経済改革の検証
	ハンガリー・日本	東欧諸国における経済改革 日本と比較したハンガリー産業連関表の分析による
	ブルガリア	ブルガリアが20番目のユーロ導入国になるか
	ブルガリア	ブルガリアでの EU 統合下における地域的経済格差の背景
	ベラルーシ	ルカシェンコ政権下におけるベラルーシの市場経済化とその促進要因（3件）
	ポーランド	現代ポーランド経済の構造変化 ―マクロ統計による分析―（3件）
	ポーランド	現代ポーランド経済の100年
	ポーランド	現代ポーランドの国家発展戦略と経済成長の原動力
	ポーランド	第1次大戦直後のポーランドにおける戦時経済
	ポーランド	ポーランド経済と EU ファンド
	ポーランド	ポーランド経済と海外直接投資 ―外資企業のプレゼンスと貢献の観点で―
	ポーランド・ウクライナ	食糧問題を巡るポーランド＝ウクライナ関係 ―2024年2月20日の事件を契機として―
	ラトヴィア	ラトヴィアのバブル経済崩壊と格差の政治的起源：東欧 EU 諸国における政治経済現象の極端例として
	リトアニア	リトアニアのユーロ導入
	ルーマニア	Procyclical economic policy and risks on economic growth sustainability in Romania
	ロシア・東欧	ロシア・東欧経済論
産業・工業	ウクライナ	ウクライナにおける養蜂の地域類型とミツバチ製品の消費の特徴
	チェコ	チェコにおける産業政策と産業構造の変化
	チェコスロバキア	チェコスロバキアの工業について（2件）
	ハンガリー	ハンガリーにおけるトラック・バス生産の国際化と経営立地
	ブルガリア	ブルガリアにおける農業ビジネスの課題と展望
	ポーランド	COVID-19 下のポーランド自動車産業
	ポーランド	欧州自動車産業におけるポーランドの位置づけの変化と現状
	ポーランド	ポーランド自動車産業における多国籍企業
	ポーランド	ポーランドにおける自動車産業の発展経路（4件）
	ポーランド	ポーランドにおける食品技術の研究と教育
地域開発・都市計画	ボスニア・ヘルツェゴヴィナ	ボスニアヘルツェゴビナの畜産事情
	セルビア	セルビアからの対外移住と過疎化
	中南東欧	EU における国境を越えた地域計画の手法
	ハンガリー	社会主義後のブタペストにおけるツーリズムジェントリフィケーション
	ポーランド	「社会主義の計画都市」の現在と過去の記憶 ―ポーランド、ティヒ市の調査から―
	ポーランド	第二次世界大戦後のポーランドにおける幻の国土計画と中心地理論
	ポーランド	ポーランド・ボズナン市における東欧革命以降の都市再生の地域特性
	マケドニア	マケドニアにおける伝統的住居についての研究

環境	中東欧	中東欧地域における環境政策
	ルーマニア	ルーマニア、ドナウデルタにおける環境保全とエコツーリズム
観光	チェコ	自転車まちづくりと観光振興：チェコ共和国の事例より
	ブルガリア	ブルガリア・バンスコにおける観光発展と空間構造（2件）
	ユーゴスラヴィア	ユーゴスラヴィア地域の観光資源
	ルーマニア	Rural Tourism in Romania
	ルーマニア	ツーリズムの対象としたルーマニア
人口・移民・ 難民	チェコ	チェコ共和国における外国人住民の現状と難民問題
	ハンガリー	The Role of Identity and Ontological (In)Security in Return Migration: an Empirical Perspective from Hungary
	ハンガリー・チェコ・スロヴァキア・ポーランド	中東欧4ヵ国からの急速な人口流出
	ブルガリア	ブルガリアからの人口流出と過疎化
	ポーランド	20世紀初頭ポーランド人社会における国際的婦女売買への対応 ―「ワルシャワ・キリスト教婦女保護協会」を中心に―
	ポーランド、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ	東欧3国の移民問題：ポーランド、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ
	ルーマニア	ルーマニアからの人口流出の諸問題（5件）
	ルーマニア	ルーマニアにおける国外移民問題に関する経済的考察（2件）
	スロヴァキア	スロバキアの年金制度
社会・福祉	チェコ	チェコの年金制度
	ハンガリー	国家主導性の観点からみたハンガリーの社会政策
	ブルガリア	ブルガリアにおける農村の生活環境
	ブルガリア	ブルガリアにおける農村の生活環境
ジェンダー	チェコ	チェコの大学における技術系学部ジェンダー的傾向
	チェコ	チェコの中等教育においてジェンダーが進路選択に与える影響
	チェコスロヴァキア	社会主義チェコスロバキアにおける女性像の変容過程（2件）
	東欧	ポスト社会主義時代の東欧女性史・ジェンダー研究（2件）
	ポーランド	ポーランドにおけるジェンダー史研究の新潮流 ―女性シリーズを中心に―（5件）
教育	エストニア	エストニアと日本の理科教育の比較から見える教育戦略と参考とすべき視点（2件）
	エストニア	エストニアの理科教育と理科教師教育（予察）
	クロアチア	クロアチアの歴史教科書問題 1990年代の紛争に関する記述を中心に
	スロヴァキア	スロバキアの学校給食
	チェコ	チェコの教育の歴史（3件）
	チェコ	ブラハ日本人学校中学部における総合的な学習と遠足の取り組み
	ハンガリー	ハンガリーにおける教育法（1868年の）施行と制度的安定化
	ハンガリー	ハンガリーの学校と教師
	ブルガリア	東欧の子どもたちと幼児教育（1）ブルガリアの保育の現状と子供たち
	ポーランド	転換期ポーランドの教育
	ポーランド	美術鑑賞教育は児童に何を教えようとするか ―日本とポーランドの初等教育の教科書比較から―
	ポーランド	ポーランド共和国の教育システムと武道教育
	ポーランド	歴史を記憶する教育 ―小学生の「アウシュビッツ教育」の実践を中心に―
食文化	ブルガリア	ブルガリアにおける食文化の形成とその変容 ―社会主義期からコロナ期に至るまで―（5件）
	ブルガリア	ブルガリアのポスト社会主義期におけるヨーグルトの表象 ―トラン地域の博物館展示を事例として―（5件）
	ブルガリア	ヨーグルトとブルガリア ―生成された言説とその展開―
	ブルガリア・日本	日本とブルガリアを架橋するヨーグルトの言説
	ブルガリア・日本	日本とブルガリアの架け橋 ―真正性を反映する「おばあちゃんヨーグルト」―

人類学・民俗・表象	チェコ	ポスト社会主義のトリックスター ―チェコ共和国におけるポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行の契機―
	ハンガリー	オルタナティヴなフォークロア史の可能性 ―ハンガリー国立民俗アンサンブルとダンスハウス運動にみる劇場性と真正性の相剋―
	ハンガリー	19世紀ハンガリーにおけるヒゲと男性性
	ブルガリア	体制転換と仕事に関する人類学的考察 ―ブルガリアの村から見た社会主義、ポスト社会主義、EU 拡大―
自然	北マケドニア	名水を訪ねて ―北マケドニア共和国の水―
	ポーランド	ポーランドの野生動物管理
芸術・美術	セルビア	セルビア中世美術における寄進者像 ―ジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院ドラグティン王礼拝堂―
	チェコ	画家アルフォンス・ムハのナショナリズム
	チェコ	知られざるアニメーション大国チェコ ―その栄枯盛衰―
	ハンガリー	音楽のナショナリズムとその周囲 ―ヨーゼフ・ヨアヒムとハンガリーとの関係を中心に―
	ハンガリー	近代ハンガリーにおける国民演劇運動の発展
	ハンガリー	ハンガリーの映画監督ヤンチャー・ミクローシュの空間表象に関する研究
	ポーランド	社会主義ポーランドの「雪どけ」性愛の表象：映画「地下水道」を中心に
	ポーランド	ショパン エチュード op.25 における芸術性と技術的課題
スポーツ	ウクライナ	ウクライナにおける障がい者スポーツの発展
	チェコ	鉄棒におけるチェコ式車輪の習得過程に関する発生運動的考察
言語	ウクライナ	ウクライナにおける言語イメージの変化：ロシア連邦による軍事侵攻の影響
	ウクライナ	ウクライナにおける日本語教育
	ウクライナ	ウクライナにおける日本語教育の現状と問題点（3件）
	ウクライナ	ウクライナ大学生の日本語学習動機
	ウクライナ	時代が変える言葉、時代を変える言葉：戦時下のウクライナにおける言語行為の諸相（2件）
	ウクライナ・ベラルーシ	ウクライナ・ベラルーシにおける多言語文化（2件）
	クロアチア	現在のクロアチア語について
	チェコ	チェコ語の文型の機能構造：結合価とFP（機能的構成）を中心として
	ハンガリー	異文化コミュニケーション能力のための教育とその教材化 ―ハンガリーの日本語教科書『できる』作成を例として―
	ベラルーシ	なぜベラルーシ語は危機言語なのか ―国勢調査から見たベラルーシ共和国の言語状況―（2件）
	ベラルーシ	日本におけるベラルーシ語事情 ―ベラルーシ文学の邦訳とベラルーシ語教育を中心として―
	ポーランド	ポーランド語における受動表現：日本語との対照から
	ポーランド	ポーランド語の「礼儀」に関する社会言語学的考察 ―謝罪表現のケース・スタディ―
	ポーランド	ポーランドの「法（ブラヴォ）」の意味における言語学的考察（2件）
	モルドヴァ・ウクライナ・グルジア	旧ソ連圏諸国における言語戦争について ―モルドバ、ウクライナ、グルジアにおける分離主義の特殊性―
	ラトヴィア	文化の政治的選択と社会空間 ―ラトヴィアにおける言語選択と実態調査をもとに―
	ラトヴィア	ラトヴィア共和国における言語教育・言語政策の現状分析
文学	ウクライナ・日本	ウクライナ民話の紹介 ―日本の昔話との比較―
	東欧	アンチヒーローたちの物語 少年兵、捕虜/囚人そして……
	東欧	ユダヤ系ドイツ作家の東欧ユダヤ人観・イディッシュ語感
	ハンガリー	ハンガリー詩人と戦争
	ブルガリア	ブルガリアにおける言語モデルと文学研究をめぐる論争 ―ギヨーム学派 VS ロラン・バルト―
	ポーランド	アウシュヴィッツを笑っているのか ロマン・ギャリとユーモアによるホロコースト文学の可能性
	ポーランド	収容所の過去を再解釈するということ ―『パサジェルカ』映画版と小説版をめぐる―